演題番号16

# 「感じる」経験がもたらした日記の内容の変化
# - KH coder 共起ネットワークを用いた一考察 -

○宮島 唯一[1] 後藤 圭介[2] 安田 真章[1] 唐沢 彰太[1] 鶴埜 益巳[1]

1) 脳梗塞リハビリセンター
2) 東京女子医科大学 リハビリテーション部

【はじめに】
約2ヵ月の訓練経過で様々な行為が改善し，自発的につけている日記の言語記述の変化を認めた，発症から約2年経過した左片麻痺症例を経験した．その内容を，関連性のある情報や特徴を分類・解析するテキストデータ計量分析用ソフトKH coder（樋口，2004）で分析して関係性を認めたため報告する．

【方法】
対象は右頸動脈梗塞発症した70代の女性で，1時間の介入を週2回行った．全16回実施後にその52日間の日記をテキスト化し，前半期間と後半期間の2群に分けてKH coderにて解析し，出現頻度順に抽出語リストを作り，その描画数を上位100語として，語-語・語-外部変数の関係性についてedgeで結ぶ共起ネットワークを作成し，そのテーマ分けを行い，比較した．

【結果】
介入後，左右の手指・手関節の屈伸・回内外運動，巧緻動作の協調的な操作・把持機能，歩行の緩衝，また支持での足底荷重，不整地歩行のバランスなどに改善を認めた．それらに伴って，訓練中や日記の言語記述にも身体に関する記述が増加を認めた．KH coderでの解析では，前半の共起ネットワークは分類された10グループの語群は関連性に乏しく，後半は分類された5グループに，関係性を示すedgeの増加を認めた．また，語-外部変数では前半，後半ともに「感じる」が共起関係となり，関連語句について変化を認めた．

【考察】
行為の改善とは，その予測的な制御過程に変化が生じたことを意味する．その行為の制御過程と言語記述の内容との間の関係性が示唆された．訓練で全身性を探索する目的で他者・左右・他部位・他の行為・過去の行為との比較を含めた問いを行った．結果，行為の改善だけでなく，語群の関係性が後半期間において増加したため，行為の中での手・足を「感じる」経験が，行為の改善と共に言語記述の内容に変化をもたらしたと考えられる．

【今後の課題】
言語記述変化の視覚化は，患者の志向を確かめる有用な手段の一つと考える．今後，さらに症例数を増やし，行為の改善と訓練・言語記述の関係性についてより明確な傾向を見出す調査を継続したい．

【倫理的配慮，説明と同意】
症例とその家族に対して本発表の目的を説明し，書面にて同意を得た．